

ケゼ —涼山彝族民間伝承の宝—

伍隆萱※

一、イ族民間伝承の貴重な宝—ケゼ

1. ケゼの名前と意味
2. ケゼの使用範囲
3. ケゼの表現上の形式
4. ケゼの基本的内容
5. ケゼの伝承とその他

二、ケゼと諺（エビ）、民謡、長篇詩歌（マズ）の区別

1. ケゼと諺（エビ）の区別
2. ケゼと民謡の区別
3. ケゼの長篇詩歌（マズ）の区別

概要

ケゼは中国四川省涼山イ族地区に流布している伝統的なユニークな民間伝承である。イ族語ではケゼ（kep zzep）は「口をよく動かすこと」の意味で、言葉を巧妙に使うことを指している。そのほか、いくつかのほぼ同義であるが、あまり広範には用いられていない呼称がある。それらは異なる角度からケゼの特徴を具現している。

ケゼは通常婚礼と高年齢の老人の葬礼や、または、いくつかの祝日の集まりにおいて用いられている。これらの場合にはよく二つ以上の家支⁽¹⁾が集まっている。その時、主人の側と客人の側が自分の家支の中（もしくは、別の所）からケゼの達人を選んでお互いに競い合う。その間にもしある家支の競技者が言葉に詰った時、この家支のほかの人が交代することが許される。吟詠対抗時には両者は一つの題目をめくり、一方が一首のケゼを吟詠すると他方も一首を吟詠する。このようにして勝負がつくまで行い、量が多く題目にふさわしい、言葉使いの優れている側が勝つ。

ケゼの内容は大体二つの部分に分かれている。あいさつと主体部分である。あいさつの部分はまた婚礼のあいさつと葬礼のあいさつに分かれる。その内容とスタイルは場合によって異なる。けれども「ケゼを初めから唱吟する」のは同じである。主体部分の内容はさまざまで、天文、地理、歴史、哲学、風俗などがある。ケゼではしばしば連辞、誇張、引用、此喩などいろいろな修辭法を用い題について吟詠する。それで自分たちの弁舌、博学とを巧妙に顕示する。

ケゼとアビ（諺）、マズ（長篇詩歌）、民謡などとは異なるものである。ケゼの句型は五、七、九など奇数語の句から構成されるものが主流を占める。二音節が一拍で発せられるが、最後の音節は必ず一拍である。吟詠する時リズムを伴うのであるが、しかし、通常の話しかたでないのはもちろん、歌唱をするのとも異なる。

ケゼは一つの奇妙な民間伝承である。どうしてこれは涼山地区で産まれ発展して広く伝承されているのか。これの使用されている場合と、使用されている形式、修辭の特徴を考え併せると、以

※筑波大学大学院地域研究研究科研究生

下のような大胆な推理が可能である。文化生態学的角度から見ると、ケゼと涼山イ族の家支文化との密接な関係が指摘できる。家支文化はケゼの存在や発展の土壌である。

家支は涼山イ族社会の政治組織の一つで、漢族の「宗族」は多少異なる。その目立った特徴は、政治、経済、軍事の上で激しく対抗し、衝突と競争が伴う点である。家支成員の一切の財（生命を含む）は家支の強弱に連関している。家支の個々の成員は小さい時から家支は文化の薫陶を受け、彼らの言行、振舞には家支の印が深く刻印されている。また、それは家支の利益を直接・間接に代表している。

家支間の衝突や競争が止んだことはなかった。だが、涼山イ族の婚姻は家支内では禁じられている。したがって家支間には競争あり、連盟ありの複雑な関係になった。家支婚姻関係を結び、他の家支の脅威を防ぐために同盟した。けれども、これが親類両方の家支間の衝突を解消するわけではない。婚姻は一家と一家の間だけだが、家支の全体的な利益が全てに優先されていた。

婚姻関係を結んで親類になった家支間では衝突を緩和させることが競争になった。両方が一緒に坐って、酒を飲んで遊ぶ婚礼や葬礼では、わざわざ重要な位置を占める。知識を尊び弁論を尊ぶ涼山イ族社会の中に、ケゼの話術を利用して弁舌と知識を競い合うのは、大衆的な活動になった。

ケゼの吟詠対抗は、その表面から見ると言葉の技巧の試合だが、その活動の眞の目的は「家支を誇示し、祖先を称揚する」ことにある。これは運動選手のレベルに似ていて、国家体育以外のレベルの尺度のようになった。ケゼの吟詠対抗に勝つのは、ある家支の中に技巧者が出ることを意味し、家支が栄誉を受けたことを示す。ケゼは家支の政治、経済、軍事の対立、衝突、競争のほかに「文化」的対立、衝突、競争の有機的構成部分となっている。ある意味で言えばケゼは家支文化の産物である。

ケゼの内容、形式、修辭の特徴はケゼの宗旨によって決められる。吟詠をし、歌わないのは、たくさんの内容を含み、聞く者は理解しやすいからである。リズムの選択における技巧は、ケゼの話術に効果をもたらし、変化を与えている。修辭上の強調と比喩の活用により言葉をより一層上手に操れるようになれる。名人の名言とアビの引用は、詠み手の記憶と博識とを示している。誇張はケゼのユーモアや、愉快さを一層きわだたせるものである。

一、イ族民間伝承の貴重な宝ーケゼ

1. ケゼの名前と意味

中国の大興安嶺の密林の中に住むオロチョン族、エヴェンキ族の人々はあるめずらしい動物を特別に愛している。その頭は馬に似て、身体はロバに似て、角は鹿に似て、ひづめは牛に似ている。だが詳しく見るとどれにも似ていない。人々がその学名麋鹿を通常呼ぶことはまれである、「四不象」と呼んでいる。

四川省涼山のイ族民間伝承の宝庫では、イ族も「四不象」の口頭作品を特別に好んでいる。その章句の構造は歌謡に似て、論理性、哲学性は諺に似ている。また格言のようにも捉えられ、そ

の土俗的な響きは俗語に似ている。よく観察するとやはり「四不象」である。イ族はこれを「kep zzep」⁽²⁾と呼んでいる。中国語には直訳しにくい「kep zzep」は、四川省凉山イ族の各土語地区には異称がある。例えば kep zzep, kep syp hxa juo, kep bot hxa xie, kep ggep hxa cha と多様である。このうち kep zzep が最も一般的である。凉山イ族の使用している北部の方言から見ると、kep zzep が他の呼称よりこの民間伝承形式の特徴を最も現していると思われる。したがって、本稿ではその音訳を採用し、ケゼとする。発掘・採集の過程においてケゼの一内容部分と形式的特徴からそれは「誇口詞」、「対説詞」、「対口詞」、「巧語盤詞」、「克智詩」、「克智」、「刻智」となどと訳す者もいった。これらの音訳、もしくは音意を合わせた訳によったのでは kep zzep の本質的な特徴を概括しにくい。おそらくそれゆえにこれらの訳語は広く採用されなかったのであろう。ただケゼと言う名前は近年、人々によく用いられている。

しかしながら、上記の呼称は、多様な角度から、ケゼのいろいろな意味を描き出している。例えば

kep syp hxa juo--kep (口), syp (話す, 語る, ほこる, 誇張する, 大げさに言う), hxa (舌, 交流, 対応する, 戦勝, 舌なめずりをする, 味わう), juo (言う, 話す)。

kep bot hxa xie--bot (はしる, 試合, 弁論, 論争), hxa xie (他人の話しを腰を折る)。

kep ggep hxa cha--ggep (遊ぶ), kep ggep (ことば遊び), cha (説明する, 解釈する)。

kep zzep--zzep (移す, 運ぶ)。

これらの呼称には、kep (口) と hxa (舌) とが含まれている。これは、ケゼと言語、しゃべり、弁舌の才能との関連を示している。Syp, juo, bot, xie, ggep, cha, zzep という多様な動詞は、言葉の使用及び発想の自由、機敏さを説明するものである。一般的には、kep zzep のもとの意味は、しゃべりの形式で相手を圧倒し、相手を勝つのを指すとされる。Kep bot hxa xie は試合、競争、弁論術くらべの特徴を端的に現すことができる。Kep ggep hxa juo は、その内容の上で見識が豊かなことを誇り、家支の勢力と財産を誇示することを主な特徴とする。Kep zzep hxa cha は、このような民間伝承形式が娯楽性と趣味性とを持っていることをいうのである。

2. ケゼの使用範囲

ケゼの吟詠対抗は、一般的に、結婚式や葬礼及びいくつかの祭りに行われる。イ族の俗語には「大雁が来なければ花嫁を迎えない」という諺があり、結婚式は一般的に秋と冬で行う。占師は嫁の母親の生年月日と婿の父親の生まれた年、月、日、時点から結婚の期日を推算する。婚礼の期日が近づくと、婿方は、親類と友人から七人もしくは九人（奇数）の頑健な若者を選んで、豚と酒を担いで嫁の家へ花嫁を迎えに行く。嫁の家で一定の儀式をおこなった後に、嫁の兄弟及び叔伯たちが花嫁を婿の家まで送る。嫁が婿の家に着いた日は、婿方が祝いに来た親戚、近所の人々を、宴を張って招くのである。更に、花嫁を送って来た客を心をこめて招くのである。夜には両方がお互いに歌ったり、踊ったりする。その中で、興趣豊かなケゼの吟詠対抗も行う。

イ族老人が死んだ時、毕摩（男呪術師）とか豊富な経験がある年長の蘇尼が相談の上、弔いと

火葬の日を定める。期日が定まると、各方面から親戚が来て葬礼に参加する。イ族の風俗では一軒の死者の為に皆が参列するのである。葬式では、異なった家支の親戚たちは、昼間「過銀橋」や競馬を行い、夜には唄いの歌を歌ったり、唄いの踊りをしたり、史詩マズを吟詠したりする。その際、ケゼは人々の心を打つ重要な部分を占めている。

最もにぎやかな夏祭り（火把節）やイ族の新年には親戚がお互い訪問しあい、若者たちは集まって楽しんでる時にもケゼの吟詠対抗が稀に行われる。

ケゼは姻族関係にある異なる家支だけに行われる、同一の家支の中ではケゼの吟詠対抗は決して行われない。だから、ケゼを吟詠する時には両方の呼称は大抵「老表」、「表兄」、「表弟」などである。

ケゼの吟詠対抗は特定の手順があつて、雰囲気によって、発端、発展、高潮、終結に分類される。吟詠対抗の前には、両方が弁舌に上手な選手を選出したり、他所から選手を招いたりして、各自の家支を代表させる。吟詠対抗時には、両方から二人ずつやってきて、一人が中心的な吟詠を担当し、もう一人は合いの手を入れる。まず互いにあいさつをする。それからあるテーマについて、例えば、婚姻とか、団結や規則などについて吟詠する。主人側が一首吟詠すると、客側も一首吟詠する。このように交互に進められ、競争の雰囲気がだんだん高揚していく。頭を使い、巧みな言いまわしを使って競争し、一方が言葉が尽きた時、あるいは吟詠したことが下手な時に勝者が決まるのである。長い時間吟詠しても勝敗が分けにくい時或いは時間がなくなった時は、そばにいる人が酒を持って「次の結婚式にまだ来て吟詠対抗をしてください」と言つて、吟詠対抗を終わらせる。この過程において、一方の選手が吟詠することができない時、あるいは吟詠することがあまり上手ではない時には、聞いている家支の者が代わってもよい。

3. ケゼの表現上の形式

ケゼのセンテンスは形式的制限を受けない。センテンスは長くても短くてもよい。センテンスの音節の数は、大抵五、七、九、十一などの奇数となる。吟詠する時には、二つの音節が一拍となるので、最後の音節は自然に一拍となる。段落の長短にも厳格な規定はなく、少ない場合は十数行で、多ければ数十行、もしくは百行以上の場合もある。ケゼの特徴は「吟詠の試合」で、吟詠の内容は豊富で奇抜なものが要求される。その形式は内容の要求に完全に従うのである。例えば、歌謡の形式のようにきびしすぎると、吟詠者の創作と即興を束縛し、「容量」にまで影響するにちがいない。だから、ケゼは韻律による装飾をあまり強調しない、主たる手段は修辭であり、たくさん連辭、誇張、引用、比喩などの修辭法を巧みに利用するのである。

4. ケゼの基本的内容

ケゼの内容は豊富で、広く社会生活の各方面に涉っている。例えば、ケゼでは以下のように話される。「イ族の子孫がケゼを吟詠する、上は天について、下は土について吟詠することもできる。ケゼの中には徳古⁽³⁾の論しあり、阿衣⁽⁴⁾のことばもある。幸福なことを吟詠し、辛いことも吟

詠する」そこからその内容の豊富さが知られる。

ここでは、涼山イ族自治州民間文学集成事務局が収集翻訳したケゼと昭覚県の『民間説詞』（第一巻）を参照して、ケゼの内容の概略を述べることにする。

第一の部分は、「儀礼的あいさつ」である。そこには、始めの言葉、あいさつ、夫婦の縁、仲人、花嫁を迎える、花嫁を送る、花嫁への祝言、福星のはたらきを促すなどいろいろある。内容は大体互いのあいさつである。主人側は客人を歓迎し、接待の至らなさを詫げる。客の側は主人の招きに感謝して、主人の住んでいる場所、物産、気候、財産、人柄などをほめるのである。例えば「あいさつ」の中の節は以下のように書かれている。

賢くて才能がある「表兄弟」(姓の異なるいとこ兄弟) / あなたたちと私たち全部で四人 / 阿口呻滴托⁽⁵⁾ の去勢した雄牛のように向き合って叫ぶ / けれども、お互い角で戦わない / 吉曲拉達⁽⁶⁾ の馬のように向き合ってなく / けれどもお互い足で戦わない / 惹夫俄吉⁽⁷⁾ の牡羊のように向き合って叫ぶ / けれどもお互い角突き合わさない / ぬまの周りの肥えた豚のように / 一緒に草を食べる / けれどもお互い噛み合わない / 阿茲依覚⁽⁸⁾ の雄鶏のようにお互い鳴く / けれどもお互いつつき合わない。

両家の仇敵があいさつをする / 聞くのは死亡と子孫の絶えること / 両家の親友があいさつをする / 聞くのは収穫と富のこと / 両家の兄弟があいさつをする / 聞くことは幸福とからだの調子。

あなたたちの所には / 友人は元気かい / 収穫は豊富かい / おとなたちにけがとか病気とかないでしょう / 子どもの腹は痛くないでしょう / 畑にはひょうや霜や雪がないでしょう / 牧場に山犬や狼、虎や山猫がいなく / 鶏の群れをタカが襲うことはなかったでしょう。

今日の晩は / 犬がほえて客が慌てる / 客が着くと主人も忙しい / 今晚は楽しい夜よ / 客を座に招いてもうれしい / 客にたばこをあげてもうれしい / お互いに話しをするのもうれしい。

私はよくいろりをかこんで想う / なべからおいしい肉が出るように / 私はおいしい肉を切って、客にごちそうする / 親家 (チンジア)⁽⁹⁾ と一緒に楽しく話す / 惜しいことに、なべから肉が出てこない / 全体が雲って真黒いばかり / 逆に、私がなべに火を付けて暖かくしなければならない……仕方がない / 私はこのように貧乏たらしい / ただ坐って話をするだけだ。ケゼを吟詠するだけだ。

第二の部分は「ほこ先の小手試しである」。その内容はお客の集まり、或許、求め、暇がない、さがすこと、当てはずれ、話し切れないこと、誇張すること、ふさわしくないこと、比較、数えること、信じられないこと、うそをつくこと、黒白の結果、ありのままに言うこと、似ているもの、かつこう、雁、理屈、愛、遊戯、酒に酔わないことといろいろ有る。両方がお互いに質問を出し続けて、初めの時の謙遜を改め、主題について、自分のよく知っている知識に触れて、自分たちの知識と弁舌を示す。ここで「ケゼは無限だ」というケゼの一部をとりあげてみよう。

かつこいいとこ / 空はよく晴れている / 客も元気だ / 今晚はケゼの吟詠がうまくできるにちが

いない。

牛と羊が喜んで鳴き/聞いて心が打たれる/友人は立派な様子で/見ると心が打たれる/眞の英雄ならば/敵を逃さない/私たちもケゼをよく準備して/あなたたちと試合したい。

私たちのケゼには首尾がある/始めと終わりがはっきりしていて/天の神も聞いて喜ぶ/地の神も聞いて笑う/私たちのケゼは強風の様で/あなたたちが不注意だと/天にまで吹きとばされてしまう/岩の下まで吹かれてしまう/私たちのケゼは野火の様だ/火の光りが幾つかの坂を照らす/あなたたちが不注意だと/やけどをしてしまう/広場には火がないけれど/私たちのケゼは広場に火をつけられる/川には火がないけれど/私たちのケゼは川に火をつけられる/私たちの家支の人が/手を伸ばせば富に届く/足踏みすると金銀が出る/至る所でケゼを吟詠する/私たちのケゼは/母と娘が布を織っているようだ/一匹一匹と織っていく/父と子がかごを編んでいる様だ/何十何百のざるを編んでいく。

競馬場の選手はいい馬に乗る/吟詠対抗がよいよ激しくなる/戦場の英雄は名のりをあげ/お互いに近いてくる。

今晚はうれしい晩だ/私たちはケゼを吟詠する/一人が吟詠終えたらもう一人が受け継ぎ/あなたたちがケゼの吟詠対抗を望むなら/私たちのケゼは吟詠し切れない。

第三の部分は「哲理を語る」である。その内容には団結、同類、昔の人の名言、そんなことはありえない、独りがよい、学問のすすめ、すばらしい能力、同じでないこと、異なること、けものは同じ、達人、やさしくてかしこい婦人、いじめないこと、立ち居ふるまいものの起源、生死、人として、早いものくらべ、ものの長短などがある。一方では、イ族の人々のもつ世界観、規律、および社会、人生の認識、解釈と評価が表れている、もう一方では、イ族の人々は「多く知っていることが名誉である」ということを示している。「同じではないこと」というケゼを例に挙げる。

九人の娘が/一緒に九個の口弦(小笛)を持つ/持ち方が同じでも/吹き方は同じではない/吹き方が同じでも/感動させる度合いは同じではない。

九人の若者が/一緒に九個の竹笛を持つ/持ち方が同じでも/吹き方が同じではない/吹き方が同じでも/調子やメロディーは同じではない。

九人の大人が/一緒に九個の琴を持つ/持ち方が同じでも/弾き方がちがう/弾き方が同じでも/感動させる度合はちがう。

九人の男が/一緒に九個の胡琴を持つ/持ち方が同じでも/弾き方がちがう/弾き方が同じでも/耳を楽しませる度合はちがう。

九人の老人が/一緒に九個の羊毛のパチンコを持つ/持ち方が同じでも/撃ち方がちがう/撃ち方が同じでも/撃ったものの数が同じではない/撃ったものの数が同じでも/撃ったものの質がちがう。

九人の立派な若者が/一緒に九個の犁を持つ/持つ姿が同じでも/耕した跡がちがう/耕した跡が同じでも/耕した深さがちがう。

九頭の馬に乗った九人が/一緒に九個のくらを持ち/持ち方が同じでも/くらの用意のしかたがちがう/くらの用意のしかたが同じでも/馬に乗る技がちがう/のる上手さが同じでも/競争の結果がちがう。

九人の射撃者が/一緒に九丁の銃を持つ/持ち方が同じでも/使い方がちがう/使い方が同じでも/当たり方がちがう/当たり方が同じでも/敵を殺す効果がちがう。

九人の学生が/一緒に九冊のテキストを持つ/持ち方が同じでも/学び方がちがう/学び方が同じでも/理解のしかたがちがう/理解のしかたが同じでも/応用のしかたがちがう。

第四の部分は「ユーモアな事」である。その内容には、規則、喜び、私たちの家族のこと、ほめる、合った事、自慢、幻想、未来、怖いこと、怖くないこと、嘆き、かわいそうなこと、といろいろある。ここでは「幻想」の例を挙げる。

世の中にはウールと言う駿馬がいる/かれはおやゆびのような大きいソバの粒があると幻想を抱く/名前はシーザと言う黒い牛がいる/かれは碓のような大きいかぶがあると幻想を抱く。

茶色の毛の豚が/新鮮な肥えた羊肉の幻想を抱く/アーコと言う去勢した鶏が/手のひらの様な大きいソバ菓子の幻想を抱く。

茶色の雌鶏が/道の様な長い虫の幻想を抱く。

角を巻いた山羊が/岩上の木の若い芽の幻想を抱く。

ムーチイと言う犬が/箕のような大きいザンバ⁽¹⁰⁾の幻想を抱く。

ムーニュと言う猫が/米とぎざるのようなラードを幻想する。

ある頭のいいおばあさんは/碓のような大きな卵の幻想を抱く/とっても賢いおじいさんは/腕のような太い豚の骨髄の幻想を抱く/ある豚飼いの子供は/麦わらぼうしのような大きいイチゴの幻想を抱く/ある少年は/炉のような肉のつまった赤身の幻想を抱く/美人で名高い娘は/川のような長い絹糸の幻想を抱く。

のろまな人は/なわで太陽をしめて、家に持って行くことの幻想を抱く/頭がよくなければ/虎に鞍を備えて乗ることの幻想を抱く。

第五の部分は「イ族の故里の賛美について」である。その内容には、名物、名山、最もいいものは何か、美しいものは何か、適度なことは何か、大きいものは何か、「ある」のは何か、楽しい遊びなどがある。実際の吟詠対抗の中では、さまざまな動物、植物、故里の地理、産物、風俗の方面の知識を競うのである。例として「最も秀たものは何か」のケースを挙げる。

甘洛地方産の金銀が一番いい/白彝と黒彝がそれを見たら飛びつくよ/依諾⁽¹¹⁾ 地方産の宝剑が一番有名だ/英雄がそれに出くわしたら飛びつくのだ/白い玉が嵌っている英雄の帯/甘洛李匹産のが一番いい/若い英雄がそれに出くわしたら飛びつくよ/大姿⁽¹²⁾ 産の蜜の球が一番有名だ/どんな女もそれに出くわしたら飛びつくよ/瓦爾特支⁽¹³⁾ 地方産の金の印鑑が一番いいよ/イ族の役人と漢族の役人がそれに出くわしたら飛びつくよ/奥山の若竹の竹節が一番長い/どんな

竹取りもそれに出くわしたら飛びつく/崖に生えた杉の木は一番まっ直ぐだ/木こりがそれに出くしたら飛びつくよ。

空を駆けるタカの翼が一番強い/低空飛行のハイタカの爪が一番鋭い/水底深く泳ぐ魚の尾びれが一番よく水を切る/崖の上に生えた毒草のとげが一番鋭い/深い山に棲む鹿の角が一番強い/肥えた土に生えた野草の葉が一番茂っている/岩の上に生えたアジ木の葉が一番茂っている/山の上のスギはがんじょうで根も深い/深い山の流水が清くて透明だ/空を飛ぶ白頭のタカの翼が一番すっきりしている/莫合洛哈産の披毡(イ族の民族衣裳)が一番きれい/甘洛和吻産のみのが一番いい/婆合峨答⁽¹⁴⁾産の色絹が最もいい/阿其比爾⁽¹⁵⁾産の笠が一番美しい。

実は、これらの一切は/もしかするといいものではないかもしれない/ただ思いつくまま言った文句だから。

また、「名物」の例として、以下のものをあげる。

東方には黄色のしおが出る/西方には白いしおが出る/南方には灰いろのしおが出る/北方には黒いしおがでる/甘洛には白い玉を嵌めた英雄の帯がでる/爾洛查和⁽¹⁶⁾には絹のスカーフがでる/爾恩街⁽¹⁷⁾には鹿の皮で作った腹掛けがでる/吉之拉達⁽¹⁸⁾には白い玉で作った煙杆がでる/義洛⁽¹⁹⁾地区には光り輝く宝剣がでる/熱可阿覚⁽²⁰⁾には金竹で作ったぼうしが出る/大別爾庫⁽²¹⁾には蜜蜡珠が出る/大別洛洛⁽²²⁾にはさまざまな串珠が出る/米市坝⁽²³⁾には銀口弦が出る/漢族の地区に真黒の銃が出る/達爾呷吉⁽²⁴⁾には銀花の半えりが出る/瓦岡所色⁽²⁵⁾にはたて笛が出る/唐則各和⁽²⁶⁾には蓑衣蓑草が出る/西昌城にはちょこが出る/瓦呷所失⁽²⁷⁾には刺繍のズボンが出る/越西地区には百褶彩裙が出る/火補利托⁽²⁸⁾の羊毛披毡は非常にいい/旁各山の麓には毛の百褶裙が出る/漢源城には銃が出る/莫基爾庫⁽²⁹⁾には披毡が出る/安寧河には黒と白の玉蜀黍が出る/爾洛查和⁽³⁰⁾には陶器のお碗が出る/特沢波之⁽³¹⁾には金が出る/竹核⁽³²⁾地区には竹の笛が出る/果渣瓦西⁽³³⁾には女がかぶる八角帽子が出る/越西地区には銅製の喇叭が出る/雷波地区には白い披毡が出る/峨边地区には青い羊毛の披毡が出る/四方の各地にはさまざまなスカートが出る/四方の各地にはかぶりものが出る/格都阿帕約⁽³⁴⁾では太陽が一番輝いている/洛非山口⁽³⁶⁾の月が一番明るい/次若利尼⁽³⁷⁾では星が一番明るい。

第六の部分は「雑多なことについて」である。その内容には、丸いものについて、区別とはどういうものか、苦しいことについて、因果とはどんなものか、母について、離れられないとはどういうことか、代々継承されるものとは何か、美しいものについて、規則を守るはどのようなものか、勘違いとはどんなものか、ひとりぼっちとはどういうことか、といろいろある。例として「区別とはどういうものか」のケースを挙げる。

新年旧年は/豚を殺して新年を区別する/上半月と下半月は/月の形で区別する/冬と春は/山の頂上の雪で区別する/昼と夜は/雄鶏の鳴き声で区別する/牛の良し悪しは/牛の肩で区別する/綿羊の良し悪しは/太っているか痩せているかで区別する/羊の良し悪しは/角の形で区別す

る/豚の良し悪しは/豚の足の太い細いで区別する/鶏の良し悪しは/鶏冠の赤色の深さで区別する/犬の良し悪しは/鼻がきくかどうかで区別する/水の流れる方向は/山脈の形で区別する/高山と平地は(暑い寒い)/綿羊を飼うか飼えないかで区別する/高山と低山は/植物の種類で区別する/イ族地区と漢族地区は/使う言葉で区別する/山と麓は/谷間の流水で区別する/人の強い弱い/知恵の高い低いで区別する/人の賢愚は/知識の多少で区別する/知恵の多少は/学んだ状況で区別する/主房と側房は/オンドルで区別する/主人と客人は/オンドルの柱⁽³⁸⁾で区別する/親家と親戚は/敷居の内外で区別する。

さらに「物事の両面性について」例をあげる。

高い空を飛ぶ鷹は/知識が増やすことができる/けれどもそのため翼を折ったものもいた/たくさん歩いた虎は/三種の食物をたらふく食べた/それで足の爪を裂いたものもいた/茲莫は自分の領地を広めるために/三つの印を増やした/けれども激しく反対を受けたものもいた/黒彝の領地は広くて/三種の利子をたくさん取った/けれども、それで監獄に入れられたものもいた/はるばる歩く肇摩は/人より三巻の経典についてたくさん知っている/けれども、また保護神にはからかわれてしまう/はるばる歩く若者は/ひとより三種の技術がたいへんうまい/けれども作り直す時もある/はるばる歩く娘は/人より三種の花紋をたいへん上手に刺繍する/けれども、針に指を刺す時もある。

第七の部分は「根元を探す」である。この主要内容は、物事の起源と発展と変化を追って語ることである。その内容は木莫哈瑪⁽³⁹⁾の来歴、馬の来歴、鉄の来歴、世界のはじまりなど様々である。以下、例として「馬の来歴」を挙げる。

大昔/馬の卵が天から落ちた/一番高い天から青空に落ちた/青空から白い雲まで落ちた/鷹がそれに会って言った/これは私の卵だ/拾って三年三月間かけてかえそうとした/ひなをかえしたのか/ひなをかえせなかった。

馬の卵は地面にころがった/史果巴赫がそれに会って言った/これは私の卵だ/彼はそれを持って地下に埋め三年ほどかけてかえそうとした/地上に掘り出し、また三月間かけてかえそうとした/ひなをかえしたのか/一頭の馬をかえした/卵からかえされた馬は/息も弱くて/角が生えるはずの所に耳が生えたのだ/角は耳のかわりになった/鼻の息から出る息は白い霧のようだ/馬のたてがみは竹を並べたようで/馬の尾は楠竹のように太い/前足で土を飛ばし/後の足で大地を蹴った。

馬はウズ⁽⁴⁰⁾類に属する/数え切れないほど多い子孫を産んだ/それには五支族あって/一つ目は馬だ/二つ目は騾馬だ/三つ目は驢馬だ/四つ目は草原のお大きな馬だ/五つ目は山の中のしまうまだ。

「鉄の起源」は、初め、隕石にまでさかのぼって語られる。

天から隕石が落ちた/あたり一面鉄だ/甘洛の鉄山は赤く/阿則の鉄山は黒い/天にドンドン響く/天上の火花が飛び散った/天上の雷と思っていたのに/流星が落ちると思っていたのに/たくさんさんの鉱石が落ちてきた/人々はそれが鉄鉱と知らなかった/茲莫⁽⁴¹⁾をはじめ老人や若者や華摩や娘まで皆しらなかった/職人に見せてやった/職人は博学だ/職人が経験豊富だ/職人は実際にものごとをこなすことができる/だから、鉄の鉱石と知った/農具を作れると言った……

第八の部分は葬礼の時だけに使用される。だいたい婚礼のあいさつの部分に相当する。これは葬礼のあいさつ、死神と死、弔辞等の部分に分かれている。その内容には死者の死因を尋ねる、死者への呼びかけ、生者を慰める、生老病死が自然の規則であることを説明するなどがある。「葬式のあいさつ」の一部分を例としてあげる。

病気で死ぬことから始めよう/死から逃れることはできるのか/死から逃れることはできない/もし、ののしることで生命が救えるなら/華摩と蘇尼は死なないよ/もし、金で生命を救えるなら/金持ちは死なない/もし、権勢で生命を救えるなら/茲莫は死なないよ/もし、技術で生命を救えるなら/職人は死なないだろう。

あらゆる生命のあるものは/病気なしとか、死なないとかあるのか/病気なしとか死なないとかはない/立派な体の茲莫でも死ぬよ/百金に値するリーダーでも死ぬよ/この世の皇帝でも死ぬ/一番大きい偶蹄類の動物でも死ぬ/駱駝でも死ぬ/鳥の中の王でも死ぬ/高い空を飛んでいる大鵬でも死ぬよ。

牛は角が衰えてしぬ/馬は額の毛が脱けて年取って死ぬ/木は中が空になって死ぬ/石は風化して死ぬ/ジャガイモは凍えて死ぬ/トウモロコシは熱さで死ぬ。

人々は山が死なないと言っているが/野火に焼けて山が死ぬ/人々は岩が死なないと言っているが/岩は崩れて死ぬよ/人々は塑像が死なないと言っているが/色が脱けたら死んだことよ/人々は太陽と月が死なないと言っているが/昼は月が見えない/夜は太陽が見えない/これも死んでいると言えることだ。

死んだ後に復活できるのは/道端の野草だけだ/行ってまた帰るのは/山の中のかっこう鳥たちだけだ。

今夜/賢い老人は/支えられても起きられない/呼ばれても答えられない/私たちも心がつぶれそうだ/私たちはかれから離れたくない/離れたくなくても離れて行くのだ/私たちはこれ以上言うことができない/あなたたちが後を継いでくれ。

また別の例をあげる。

英雄の親家/私たちは訃報を聞くとあわただしく道を歩いた……/久しく前に人から聞くと/(死者) かいせん病だと言っていた/体が痛いと言うことで/普通の病気で、たいしたことがないと思った/後に人から聞くと/熱があったと言った/風邪を引いたと思ったが/突然訃報が晴天の霹靂のように/老人が死んだと告げられた。

立っている者はすぐ葬式へ来る/坐っている者はすぐに立つ/ザンバを作るのにも間に合わなくて/麦粒だけを持って家を出た/家の内に行ってきれいななわを持つのも間に合わなくて/馬を縄でしめたまま来てしまった/壁に掛けてある彫刻したくらを持つのにも間に合わなくて、あわてて粗末なくらを用意し/新しい服に着かえるのも間に合わなくて/普段着で来た。

道は曲折でやっと到着した/三つの山脈を越えた/頂上に暴風が狂う/けれども暴風を避けようとはしなかった/暴風が三枚重ねの披毡をひきちぎ、気にしなかった/三つの山のスロープを越えて/ころがる石に三回出会った/足を三ヶ所傷つけても/何事も無かったように走って来た/三つの谷を越えて/山津波に三回出会った/つえが三本流された/けれども、全然気がつかなかった。

今晚この時/親戚たち/親家たち/親戚でない人來ているのか/親戚でない人は来ない/茲莫の親戚たちが虹のように飛んで来た/黒葬の親戚は雲のように湧いてきた/白葬の親戚が藤づるのように次々と来た。

雄鶏が泉水を求めて来る/鹿が若草を求めて来る/私たちが親戚を求めて来る/親戚とあいさつをするため/親戚の長所を学ぶため/親戚と言葉を交わすためにやってきた。

以上の八部分のように分けることは、科学的とは言えないが、天文、地理、歴史、哲学、風俗、論理、文学など自然と社会との各方面の内容が含まれており、ケゼの内容の多様性を大きいにかがわせる。開始時吟詠される挨拶の部分以外は基本的にケゼの主体部分と見ていい。これらのケゼは、外見上は乱雑だがこれはケゼの大きな特徴の一つである。つまり、一首一首のケゼは「祖先を称揚する、家支を称揚する」ということを表象している。

5. ケゼの伝承とその他

ケゼは涼山イ族地区に広く伝承されている。筆者が収集入手した資料の限りでは、イ族の他地区ではケゼあるいはケゼの変体が伝承されていることはない。蘇連科さんによると、イ族伝統文化の研究者の多くは、かつては、ケゼが主に「義諾」(yino) 地区で伝承されていると認めている⁽⁴²⁾。

ケゼの大規模な収集・翻訳は1980年代の始めのことであった。それ以前は、ケゼに触れた人々の多くが誤っていたため、長い間重視されなかったのである。例えば、馬長壽先生はケゼを主人と客人の話し合う弁舌試合とだけ見ていた。「經典以外に、イ族にはうまく話す人“説客”がいる。彼らの歴史知識は非常に豊富であり、婚礼と葬式、新年と祭り、集会の時には、これらの人が人々の前で“口賽”(khasi) を行う。私たちはその中からいろいろな古今のおもしろい史実を聞けるのだ。」⁽⁴³⁾と彼は述べている。ケゼの価値、伝承の変質及び伝播による変形等が今後の研究課題となるだろう。

二. ケゼと諺(エビ)、民謡、長篇詩歌(マズ)の区別

ケゼは主として吟詠の形式で、先祖と家支を誇ることを目的として、イ族の婚礼、葬式及び幾

つかの祭りの時だけに行われて、他の家支の人々とその高低を比べる「吟詠対抗する」民間伝承である。ケゼは「エビエジ」や、叙事詩、民謡、神話、伝説などの内容を融合して、それらから要素を吸い取り、さらに改良したものである。ケゼは民間伝承の各種類の創造方法を基に、内容と風格の各方面で独特な特徴を備えた民間伝承の独立的、新しいスタイルとなっている。その特徴をなおさら明らかにするためケゼをエビなど形成の近いものと比較してみる必要がある。

1. ケゼと諺（エビ）の区別

エビ（又「エビエジ」とも言う）の特徴は簡単な言葉で訓戒や経験をまとめて、明らかにした、格言に近いものである。構造の上でエビは長いのもあれば短いものもある。一、二句、三、四句から、長い物では多数の句から出来ている。エビの言語は簡素で、想像力が豊富で、話し易いものである。四句以上のエビは芸術表現の方面でイ族の民謡とよく似ていて、普通に話すように言っても、歌を歌うこともでき、抒情の味が深い。それで一般の格言と区別がある。エビは中国語の「諺」と全部同じとは言えない。エビ又はエビエジとはイ族語の言葉を中国語で音訳したものである。

ケゼはエビに似たところがあるけれど、よく比較して見ると両者の間に差別を発現することができる。

A. 言語の風格から見れば、エビは構造が簡単で短く、定型になっているし、古語をよく使い、副詞などはあまり使わない。その中に解りにくいものもある。エビに比べて、ケゼも大体定型になっているけれど、完全な定型ではない。したがって構造もより自由である。同じケゼにしても地方により、時により、場合により、話し手によって大きな変化を起こす。エビはそう言う変化はない。例えば：Fyrt la hlop ap, gge la hlop go hep, O la mba ap syp, yy la vat go hep. (太陽と月の昇没を見ると、西と東がわかる。川の流れを見ると、上流と下流がわかる。) というエビがある。ここにある東 (fyrt) と西 (hlop) は現代イ族語の北方方言で「東方」(bbu ddu jji) と「西方」(bbu jji) に変化している。このような古い言葉はエビの中によく見られているが、ケゼにはほとんど使われていない。

B. 言語の構造面で見ると、エビは短い、ケゼは長い。エビは一般に一、二、四句からでき、十余りの句からできているものはほとんどない。これに比べると、ケゼは少なくとも十余りの句からでき、長いのは数十句、百余りの句からできている。エビは五音節、七音節の対偶句が基本的句型として、音節の整然さ、対称的なのを強調して、文が短くても意味が深いである。ケゼはそうではなく、いくつかの段落の自由な組み合わせを基本的として、変化が多い。又、音節などの整然さ、対称などを強調せず、一般的に並列や、比喩、誇張、引用などを使い、その文型は日常生活に使う言語よりやや簡潔で、精緻である。エビはケゼによく引用される。一部のケゼの中に十数のエビを引用することがある。この意味から言えば、ケゼにエビが含まれる。

C. 思想内容の上から見ると、各種の実践や経験のまとめとしてエビは「教」と「訓」を強調し、科学性を持っていることが明らかである。多くのエビは判断や推理のもので、ある客観的真理や

経験、或いは人々の考え、認識などを表すことが目的で、実践性も哲学性もある。それでエビは言葉が少なくても考えを表すことができる。それに対して、ケゼは物事や状況を直接に描くことを強調する。文を華麗で、いきいきしたものにするため大量の言葉を集めてする、其の為にケゼの内容を俗っぽくしてしまうこともある。

D. 作用や実際の運用から見ると、エビが各種の実践や経験のまとめとして、人々が世々代々いく度も実践して正しいと証明されている、それが勿論知識を蓄積し、伝播する役割を果している。それで人々はエビが大好きで行動の指南や道徳行為の規範として、それを社会政治活動や家庭及び社会的教育に運用し、親子の間、先生と生徒の間、友達同士でもそれを互いの教科書として使っている。エビはイ族の社会で習慣法の役割を果しているとも言えよう。

「エビ是話里的塩巴」,「説話一条線,エビー根針」の諺がある。イ族の社会では人々は日常の会話でエビを良く使う、結婚式、葬式、宗教の儀式、祝日の時、喧嘩を裁く時、最も適切で、具体的であり、説得力のあるエビで自分の見方や思想を表そうとする。要するにエビはイ族の社会生活の致る所に存在している。言い替えれば、エビはどんな場合でも必要があるし、使うことができる。

それに対して、ケゼは結婚式、老人の葬式の時、祭りの時家支の間で吟詠して競技を行うもので、競技性と娯楽性をもっている。ケゼは男性だけが吟詠し、女性はやれない。エビはそういう制限がなく、どんな人も使うことができる。

2. ケゼと民謡の区別

ケゼと民謡は言語の上で多くの共通点をもっている。例えば、通俗で分かり易い、比喻をよく使うなどである。しかし両者の間に多くの相異点もある。

- A. 民謡には一定の曲があり、主として歌う；ケゼには一定の曲はなく、主として吟詠する。
- B. 民謡の文言は短い、ケゼの文言は長。民謡は主として四から八句まででき、ケゼは一般的にいくつかの段落からできる、且つ、各段落の中に少なくとも四、五句がある。民謡は句型の整然、対称などを強調している。ケゼはそういう要求がない。
- C. 民謡は誰でも、どんな場合でも自分の感情を適当な曲で一人でも歌うことが出来るが、ケゼは二つ以上の家支の男子の間でしか吟詠できない。

3. ケゼと長篇詩歌（マズ）の区別

「マズ」は結婚式と葬式の場合、楽器を演奏して歌い或いは吟詠して競い合う長篇叙事史詩である。その代表的作品に「勅俄特依」がある。場合によってマズは上演の方式が違う。結婚式の場合なら演唱と共に踊る。その具体的方法は、花嫁の家支と花婿の家支が対面して、それぞれ二人の選手を選び、その選手たちがイ族の民族衣装「擦爾瓦」をかけて、その襟を振りながら、マズを演唱する。一方の二人の選手が演唱してから相手に継いで行く。数十回もこのようにしてから一方の勝利で終わるか、勝敗を決めないで終わる。葬式の時は踊って、マズを吟詠するのである。

それでは、ケゼとマズはどう違うのであるか。

A. 内容にしても、構造にしても、文型にしても、マズは非常に定型していて、変更できない。

ケゼはそうではなく、選手が目に見、耳に聴いたあらゆるものをケゼの内容として吟詠することができる。マズは主として五詞句を使い、ケゼは五、七、九詞の句を使う。

B. マズの中には古い言語が多く保存されて、エビに似ている、ケゼは日常生活によく使う言葉を使う。

C. ケゼはよくマズを引用するが、マズはケゼを引用しないである。

参考文献

1. 陳士林ほか著、「イ族語言簡誌」、民族出版社、1985年。
2. 陳望道、「修辞学發凡」、上海教育出版社、1979年。
3. 方国瑜著、「イ族史稿」、四川民族出版社、1985年。
4. 甘洛県民間文学集成弁公室・語委編、「甘洛県民間諺語集成」。
5. 李秀清著、「涼山イ語格言と諺」、「民族語文」1985年第一期所収。
6. 涼山イ族自治州民間文学集成編委会（編）、「ケゼ」第一集、1988年。
7. 馬学良ほか、「イ族文化史」、上海人民出版社、1989年。
8. 全国人民代表大会民族委員会事務局編、「涼山イ族社会の歴史における若干の状況について」、1957年。
9. 西南四省区イ文古籍学術会議論文、「イ族克智初探」（作者、時間不明）
10. 楊植新ほか編、「涼山イ族の諺」、四川民族出版社、1983年。
11. 昭覚県民間文学集成弁公室編、「昭覚県民間説詞」（第一集）。
12. 中国科学院民族研究所四川省少数民族社会歴史調査組、「涼山西昌地区イ族歴史調査資料選輯」、1963年。
13. 「中国諺語集成・總序」「民間文学論壇」1990年第六期。

註

- (1) 家支：漢語訳である。「家」は、イ族語で＜楚西＞と称し、ある祖先から父系で繋がる出自集団である。それぞれの「家」は、「○○家」という同じ姓をもち、その集団内での通婚は禁じられる。「家」の下位の分節を「支」といい、イ族では＜此傑＞という。分節は、その世代深度によって「大支」と「小支」に区分される。したがって、「家支」は、ある祖先から下の世代の父系出自をたどる人々およびその下位の分節をさす。
- (2) 本文はイ族の新しい文字で引用された原文を用いたものである。-p, -x, -tは声調の符号である。調値はそれぞれ21, 34, 55で、33調には符号をつけない。
- (3) 徳古：イ族社会の自然発生的指導者を指す。
- (4) 阿衣：子とも。

- (5) 阿呷滴托：地名，雲南省と貴州省の総称。
- (6) 吉曲拉達：地名，涼山州の昭覺県にある。
- (7) 惹夫俄吉：地名，涼山州の美姑県にある。
- (8) 阿滋依覺：地名，涼山州の甘洛県にある。
- (9) 親家：子女の結婚によって結ばれた親どうしの親戚関係。又は，配偶者双方の父母，しゅうと（め）どうし。
- (10) お菓子の一種類。
- (11) 依諾：地名，雲南省の永北府にある。
- (12) 大姿：地名，四川省の康定城。
- (13) 瓦爾特支：待考の地名。
- (14) 婆合蠟答：地名，涼山州の越西県にある。
- (15) 阿其比爾：地名，涼山州の勉寧県にある。
- (16) 爾洛查和：地名，涼山州の西昌市にある。
- (17) 爾恩街：地名，勉寧県にある。
- (18) 吉之拉達：地名，石棉県にある。
- (19) 義洛：地名，涼山州塩辺県にある。
- (20) 熱可阿覺：地名，涼山州美姑県にある。
- (21) 大別爾庫：地名，涼山州九龍県にある。
- (22) 大別洛洛：地名，涼山州九龍県にある。
- (23) 米市坝：地名，涼山に州喜徳県ある。
- (24) 達爾呷吉：地名，涼山州西昌市にある。
- (25) 瓦岡所色：地名，涼山州馬辺県にある。
- (26) 唐則各和：地名，涼山州越西県にある。
- (27) 瓦呷所失：地名，涼山州美姑県にある。
- (28) 火補利托：地名，涼山州越西県にある。
- (29) 莫基爾庫：地名，涼山州馬辺県にある。
- (30) 爾洛查和：地名，涼山に州美姑県ある。
- (31) 特沢波之：地名，涼山州美姑にある。
- (32) 竹核：地名，涼山州昭覺県にある。
- (33) 果渣瓦西：地名，涼山州馬辺県にある。
- (34) 約爾利歐：地名，涼山州勉寧県と石棉県境界地にある。
- (35) 格都阿帕約：地名，東方を指す。
- (36) 洛非山口：伝説の中の地名。
- (37) 次若利尼：地名，涼山州勉寧県と石棉県の交界地にある。
- (38) オンドルの側の柱より奥は内房（内側）になっており，そこに主人側の人がある。外側には

- 客人が坐る。
- (39) 木莫哈瑪民間文学を指す。
- (40) イ族の習慣では動物を四つに分ける。「ウズ」は手足があるものを指す。その中に人、馬、虎、などが含まれる。
- (41) 茲莫：イ族社会の掌権者。
- (42) 蘇連科、『涼山イ族「アビ」の言葉の形式とその音律』（修士論文）、1988年、謄写本。
- (43) 転引方国瑜『イ族史稿』P21、四川民族出版社、1984年3月版。

新刊紹介

任 章赫 著

祈雨祭—雨乞い儀礼の韓日比較民俗学的研究—

韓国文化財管理局・国立文化財研究所勤務を経て、現在、中央大学校で民俗学を講じる著者の長年にわたる雨乞い研究に新たな一書が加わった。構成は、序章で雨乞いに関する、研究史と自らの視点を述べた後、第一章旱魃による王の対策と雨乞い（韓日王権神話の研究・災害による王の罪と死・国家次元の雨乞いの諸相）、第二章民間における雨乞いの成立（災因論をめぐって・雨乞い儀礼の要素）、第三章雨乞いと地域社会（焼畑民の雨乞い・稲作民の雨乞い・漁業民の雨乞い）、総論と今後の課題と、コンパクトながら、学術論文の体裁をとる。

雨乞い儀礼については、日本の高谷重夫『雨乞い習俗の研究』（1982）と、韓国の著者による『祈雨祭と地域社会』（1999・ソウル）の代表的な著作がある。今回、日本語でなされた本書の韓日の祈雨祭の比較によって、われわれはその異同の知見を容易に得ることができる。一例を挙げれば、雨乞いにおける動物供犠は、仏教の肉食・殺

生禁止令があっても韓国ではムーダンによる儀礼に継がれるが、日本では神道のケガレ観から衰退し、神仏習合により強化されたとその歴史的变化を通して論じる。著者は、民間における祈雨祭は国家祭祀に影響を受けていること、その受容の相は、地域社会の生業及び、宗教者の関与により相違してくるとの視点を持つ。そこで、王権儀礼を歴史文献に博捜し、多様な祈雨祭を類型化した上で、稲作・焼畑・半農半漁村の雨乞い儀礼との関係性を、ムーダンなど宗教者の活動と絡めた丹念な民俗調査の結果と対照する。そして、天災により弑逆される王の死は、天候を予知するシャーマンの機能の更新を意味するなどとの魅力的な見解も各所に示す。学説を発展させる意味でもさらに説得的な史資料がほしい箇所もあるが、本書は現時点での雨乞い儀礼の問題と課題を鳥瞰できる好著である。

（佐野賢治）

B5判 168頁 岩田書院 2001年5月刊